

あとがき

人文科学研究所長 木村 琢也

『清泉女子大学人文科学研究所紀要』第四十三号をお届けする。

本号には論文十一編が収録されており、著者の内訳は本学の専任教員四名（うち所員は三名）、非常勤教員七名である。

掲載論文はすべて査読をへている。応募論文十一編中、五編を「条件付き掲載可」、六編を「掲載可」とした。応募者に対しては、採否の結果をお知らせするとともに、査読者の所見をあわせて通知した。

今号から編集委員長が地球市民学科の大野俊教授に交代した。私も今回は少しだけ編集作業にかかわり、この小さな冊子も数十人の真剣な作業の成果であることを、あらためて認識した。それぞれの専門知を結集してくださった執筆者の先生方、多忙な中、短期間に真摯に査読をしてくださった匿名査読者の先生方、精緻な英文校閲をしてくださった匿名校閲者の先生方、さらに執筆者、査読者、編集委員、印刷所の間の複雑な原稿やメールの遣り取りを取り仕切ってくださった人文科学研究所職員の永塚尋子さん、いつも高品質な印刷と製本をしてくださる丸善雄松堂株式会社様、すべての皆様に感謝したい。

四年間の所長の任期がもうすぐ終わり、私がこの「あとがき」を書くのもこれが最後になる。四回のうち三回までもいわゆる「コ罗纳禍」のもとでの執筆になるとは想像もしていなかった。二〇二〇年度の本学の授業は全面的なオンライン授業として始まったが、あのときはまだ、この騒ぎも秋ころには終わって後期

は通常の対面授業に戻るだろうと高をくくっていたのは私だけではないはずだ。そして丸二年が経過し、現在の日本は「第六波」の真つただ中にあり、毎日の新規感染者数の報道に一喜一憂している。事ここに及んでも私たちはまだ、この状態は一時の悪夢であつて、もうすぐ元の生活が戻ってくるに違いないと思ひ込んではいないだろうか。

現実はその甘くはないだろう。このウィルスをインフルエンザ並みに抑え込むことができた後にも、地球規模の環境変化という巨大な敵との果てしない戦いは続く。いや、環境変化を「敵」と捕らえるのは間違いだろう。私たちが地球上で生きていくしかない限り、地球との共存をやめることはできないし、環境変化の原因を求めれば、それは私たち人類以外にあり得ないからだ。

私が好きな映画のひとつに『八十日間世界一周』（一九五六年）というアメリカ映画がある。映画の冒頭、物語が始まる前に宇宙から見た地球の動画、と言うよりも連続写真が写る。現代の目から見ると画像も荒いし動きもぎこちない。しかし、この映画が封切られた時代の人たち、アメリカでもようやく白黒テレビが普及し始めた頃の観客にとって、これはかなりワクワクするような映像体験だったのではないだろうか。

この映画を思いだすとき、ほぼ同時に意識にのぼるのは、茨木の子の「水の星」（『寄りかからず』（一九九九年）所収）という詩である。一部を抜粋する。

生まれてこのかた

なにに一番驚いたかと言えば

水一滴もこぼさずに廻る地球を

外からパチリと写した一枚の写真

こういうところに棲んでいましたか

これを見なかった昔のひとつは

線引きできるほどの意識の差が出てくる筈なのに

みんなわりあいばんやりとしている

私たちは宇宙から写した地球の写真をじっくりと見るべきだ。

ばんやり見てはいけない。私たちも、あの国の人たちも、また別のあの国の人たちも、みんなこの中に納まっているのだから。人類が自分たちの手で傷つけた地球環境は、人類が自分たちの知恵で修復しなければならぬ。仲間割れをしている場合ではないのだ。そこで必要になってくるのは、それぞれの分野で研究の営みを続けている研究者たちの専門知である。

理工系の研究だけを推し進めてはならない。同時に人文・社会科学の推進も不可欠である。私は科学技術の発展に期待することにかけては人後に落ちないが、人間に関する研究を軽視したまま科学技術ばかりが進歩したことが現在の環境変化をもたらしたと考えている。「人間は何をするのか。人類は何をするのか」を扱う人文・社会科学なしに科学・技術ばかりが進歩した結果、危険な水準にまで達してしまっただ。そして、困ったことに人間は科学技術のように進歩できないのである。

ヘーゲルの『歴史哲学講義』（一八三七年）の有名な言葉に耳を傾けよう。

経験と歴史が教えてくれるのは、民衆や政府が歴史からなにかを学ぶといったことは一度たりともなく、歴史からひきだされた教訓にしたがって行動したことなどまったくなく、ということです。（長谷川宏記）

残念なことに、人類は二十世紀にも、そして二十一世紀にはいつても、ヘーゲルの正しさを立証し続けている。わが日本でも、太平洋戦争を体験した世代が次第にいなくなるにつれて、「歴史戦」などと称して歴史学者たちの実証的な研究結果と異なる架空の日本史を称揚する人たちが台頭するようになった。そんな張りぼて理論が、あるうことが政府の政策に影響を与えうる人たちにによって唱えられているという、うすら寒い現実がある。篤実な研究者たちによる実証的な歴史研究に敬意が払われないようでは、日本社会は退化してゆくほかないだろう。

こんなことを考えているときに、思いがけずロシアのウクライナ侵攻のニュースが飛び込んできた。Zのう上はたちまちロシア語やウクライナ語を含む「戦争反対」の声で埋め尽くされている。日本語の書き込みはどうか。ある野党議員が「戦争反対」のツイートをした。少数の賛同のリブライとともに、その十倍ぐらいの量の揶揄・冷笑のリブライが次々と投稿されている。「外交が通用しないから防衛力が必要なんじゃないか」「憲法九条が無効であることが証明された」「それならお前がウクライナに行って話し合いで解決して来い」「戦争反対」なんて、小学生が言う言葉だ」「お花畑」「お花畑」「お花畑」……

悲しい。そして、恐ろしい。ただただ悲しく、恐ろしい。